

留学体験に伴う困難の二重性

—香川大学教育学部における中国人留学生の事例研究から—

高 宁 ・ 毛利 猛*

(大学院教育学研究科) (学校教育)

760-8522 高松市幸町1-1 香川大学大学院教育学研究科

*760-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部

Dual Difficulties Accompanying Going Abroad to Study : From the Case Study of the Chinese Students Studying for One Year in the Faculty of Education at Kagawa University

Ning Gao and Takeshi Mouri*

Graduate School of Education, Kagawa University, 1-1, Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522

**Faculty of Education, Kagawa University, 1-1, Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522*

要 旨 本研究の目的は、中国の江西師範大学から香川大学教育学部に交換留学生として一年間在日した中国人短期留学生を対象とするインタビュー調査と彼らの留学生活の参与観察に基づいて、日本における異文化体験で直面した「困難」を浮き彫りにすることである。

今回の事例研究において、留学生が直面する留学生活の困難には、二つの意味があることが分かってきた。一つは、留学生が問題を解決するために様々な努力をすることによって、大きな人間成長の契機となるような困難である。もう一つは、留学生個人の努力では解決できない制度上の問題による困難である。本研究では、留学生が前者の困難とどう向き合い、人間的に成長したのかという視点から、留学生の語った留学体験の困難に関する様々なエピソードを解釈するとともに、制度上の問題点についても指摘し、留学生生活を実り豊かなものにするための提言を行った。

キーワード 中国人留学生, 留学体験, ライフストーリー, 自己変容の物語

はじめに—問題意識—

1983年に日本政府が「留学生10万人構想」を打ち出して以来、在日留学生数は急速に増加した。日本学生支援機構報告によると1983年には1万人程度であったのに対して、2003年5月には109,508人と「構想」の目標が達成された。2005年には過去最高の121,812人が来日し、2007年5月には若干減少して118,498人であっ

た。出身地域や国を見ると、ほとんどがアジア系の留学生であった。特に中国人の留学生はもっとも多く、2005年の中国人の留学生は全体の66.2%を占めた。次に韓国、台湾からの留学生となっている⁽¹⁾。

日本における留学生の半数近くが中国人であるという状況は、以上のような日本の留学生受け入れ政策に加え、中国において日本文化(ドラマや漫画)の浸透が要因になっている。この

ような中国における日本への留学志向は年々高まりをみせ「日本留学ブーム」ともいえる様相を呈してきている。こうして、多くの中国人留学生在が日本の大学に留学するようになったが、一人ひとりの留学生にとって留学生体験とは、異文化との接触によってこれまでの自身の習慣の改変を余儀なくされる大変困難な体験でもある⁽²⁾。

筆者は、2007年度江西師範大学交換留學生と偶然的な出会いによって親睦を深めてきた。交換留學生と深く付き合っていく中で留學生が直面する困難が同じ留學生に共通する事柄であったり、個人的な要因であったりしたことを見聞きした。筆者は、このような留学体験における諸問題は、単にある特定の大学や個人の問題として、個別的に扱われるのではなく、これらの要素が複雑に絡み合っ一つの問題事象として共通に体験されるという実感を持っている。つまり、留學生の留學生活の全体的な理解によって様々な問題の根本的な要因が浮かび上がると考えているのである。

したがって、筆者は、留學生の留學生活にできる限り参与し、その実態の把握や留學生のインタビュー調査に基づいたライフストーリーとそのテキスト解釈の手法によって、留學生が直面した「困難」に迫ることを試みたい。

1. 研究の目的と方法

1.1 研究の目的

本研究における目的は、中国の江西師範大学から香川大学教育学部に交換留學生として一年間在日した中国人の留學生が日本における異文化体験で直面した「困難」を浮き彫りにすることである。筆者は留學の困難には二つの側面があると考ええる。一つは留學生が困難を乗り越えるための努力によって、大きな「人間成長」の契機となる面である。もう一つは個人の努力では解決できない社会の「構造的」な面である。つまり、留學を受け入れる日本社会（日本人）や大学側の問題である。したがって、本研究では留學体験における「困難の二重性」について

明らかにすることを試みた。

1.2 研究の方法

研究の方法は、「参与観察」や「半構造化インタビュー」など質的研究の手法を用いた⁽³⁾。本研究では留學生の「語り」を中心に研究を行った。つまり、留學生のインタビューから、留學体験の困難をエピソードとして聴き取り、筆者が留學体験の「ライフストーリー」として再構成した。さらに、留學生が留學体験の困難を乗り越えるための努力が大きな人間成長を促す要因になったという見方から、この「ライフストーリー」を「自己変容の物語」として読み直した。一方で、参与観察において、留學生の日常生活から見えてきた制度上の問題という面が浮かび上がってきた。

1.3 研究者の立場

質的研究では、研究対象者を「被験者」とするのではなく、「研究参与者」として事例を担う一人として尊重される。また、研究者は、研究の現場の一員として含まれている。そこでは、研究者と研究参与者は、お互いに関わり合いながら出来事に参与し、活動していくことになる。したがって、研究の現場における研究参与者と研究者の関係性が重要になってくる。

本研究での研究参与者である女性の中国人留學生と筆者（女性で中国人の留學生）の関係性は「同質性」があると言える。ゆえに、交換留學生と容易に信頼関係を築くことができた⁽⁴⁾。質的研究における研究者の同質性とは、事例の人物との「近さ」を表しており、異質性に対する「遠さ」と対比される。ただし、研究者と研究参与者との同質性がなければ良い事例研究ができないというわけではない。

当然ながら、長所と短所がある。長所は、研究参与者と同じような慣習や感覚、または体験を通じて出来事や事象を理解できる可能性を持つ。短所の方は、研究対象を客観的に見ることが困難になり、固定的な視点や解釈に陥りやすくなる。

このように、質的研究では、研究者の立場を

はっきりと示して、その特徴を踏まえながら研究活動を進めていく必要がある。

2. 2007年度江西師範大学交換留学生の事例研究—参与観察を中心に—

参与観察とは、石川宏典によれば「人びとのいとなみの場に身を置き、そこで起こるさまざまな出来事に目を凝らし、行き交う声に耳を澄まして、その経験世界に近づこうとする作業である」⁽⁵⁾と述べられている。本研究においても、筆者は中国人留学生の留学生活世界の中に関わっていった。

2.1 交換留学生との出会い

筆者と江西師範大学の交換留学生たち（総数7名）との最初の出会いは2007年10月に香川大学で行われた日本語試験の教室においてであった。

その日、彼女たちは試験の直前に七人一緒にやって来て、「ここは試験がありますか？」と先に教室の席についていた筆者に尋ねた。筆者はその瞬間にまるで友達のように親しい感じを覚えた。初対面である彼女たちに親近感を覚えたのはどうしてだろうと後で考えてみると、筆者の夫は2005年度と2006年度の江西師範大学交換留学生と出会っており、彼らのことについてよく話を聞いていたからであったと思う。

筆者は「交換留学生ですか？試験がありますよ」と何も考えずに気軽に言った。そして、彼女らは筆者の隣に座って試験を受けた。

2.2 授業の様子

筆者は日本語試験の結果と留学生センターの教員のアドバイスをを受けて、試験の1週間後に「日本語中級文法1」、「中級聴解」、「中級読解」という科目の授業を受けた。日本語中級文法1の授業は毎週の木曜に香川大学の4号館の426教室で行われた。担当の教員は留学生センターの日本語の教員だった。「中級読解」と「中級聴解」は香川大学の非常勤講師が担当であった。毎週の水曜に2コマと3コマで4号館の428教

室で授業をした。

彼女たちとの2度目の出会いは「日本語中級文法1」であった。木曜日の朝8時40分に彼女たちはまたしても、授業の直前に一緒に来た。そして、教室の空いている席にバラバラに座った。筆者の席の後ろはS・Eさんと前はR・Uさんであった。

S・Eさんは席に座るとすぐ、中国語の東北弁で「姐，又见面了（お姉ちゃんお久しぶり）」と挨拶をしてくれた。故郷の方言を論者が日本に来てから始めて聞いた。「是吉林的吧？（吉林省の人だよ）」と尋ねたら、S・Eさんは「姐姐也是吉林的吧（姉ちゃんは吉林省でしょう）」と言った。前で座っていたR・Uさんが「我也是吉林的（私も吉林省だよ）」と声をかけた。そのとき、自分の姉妹と久しぶりに会った気がした。中国では「老乡见老乡，两眼泪汪汪」ということわざがある。その時、筆者はこのことわざの意味を実感することが出来た。

8時50分に担当教員が来た。授業が始まって、教員の自己紹介の後に、学生の紹介をした。順番は学生の席順通りである。

初めはR・Uさんであった。R・Uさんは「私は中国の江西師範大学の学部3年生です。R・Uです、よろしくおねがいします」とたどたどしい日本語で自己紹介した。R・Uさんはそのとき、かなり緊張して、声が震えていたのがはっきり分かった。次は筆者でその後はS・Eさんであった。S・Eさんは大きな声で比較的落ち着いて話をした。

その次はK・Jさんであった。K・Jさんは声が小さくて何を言ったのか聞こえなかった。K・Jさんは成績が優秀な学生であるそうだが、そのときの私にはそのように感じなかった。J・Bさんは「私はJと申します。今年は3年生でございます。日本語や日本文化に興味があります。どうぞよろしくお願いいたします」と敬語でゆっくり自己紹介した。筆者はJ・Bさんに対する印象が深かった。可愛くて、おしゃれな人だと感じた。T・Gさんは窓口近くの席に座っていて、あまり目立たなくて、小さい声だったのかをよく聞き取れなかった。K・Hさ

んは最後であった。早く、終わらせたかったようで「Kです。よろしくお願ひします」と一言だけ言った。

自己紹介の後、プリントを配られて、授業が始まった。授業の方針は基本的に担任教員が事前にプリントを配って学生が予習して次の授業で答えを合わすというものであった。授業は教員が学生の席順どおりに質問して、学生がわからないところがあったら、説明をするものというものである。

「中級聴解」の授業は水曜の2コマ目である。授業は中国にあるコールセンターの日本派遣社員の生活というドキュメンタリーを観て、学生がドキュメンタリーの内容を記述するという形式であった。ドキュメンタリー自体の内容が高度で、専門用語や敬語が多く、3年生の留学生にとっては難しいと思った。しかし、K・Jさんは他の留学生が聞き取れなかった部分でも完全に聞き取れていた。筆者をはじめ、教員もびっくりした。教員が「日本人でもなかなか覚えられない、K・Jさんすごいですね」とコメントした。その後の授業では聞き取りにくい部分は教員がK・Jさんに当てて答えさせることが多くなった。ほかの交換留学生たちもわからない所があったら、よくK・Jさんに聞いていた。

授業中、彼女たちは基本的に日本語で会話や応答をしていた。しかし、問題があったときには前後の留学生たちは中国語で討議をしていた。

彼女たちは手を上げて質問をすることが少ない。それに対して、韓国人の留学生はよく質問をする。教員は問題がありそうな留学生の様子を見ると、そこに行って、「何か問題がありますか?」と尋ねることが多かった。

「中級読解」の授業は「日本語聴解」の教員が担当であった。授業の内容が2、3回ずつで変わる。学生が一人ずつ資料を読み、教員が学生の席順どおりに質問して、学生がわからないところがあったら、説明をするというものであった。日本の漢字の意味と中国の漢字の意味がほぼ同じだから、留学生にとって「中級読解」

はそんなに難しくない。確かに、授業では彼女たちは余裕を持って問題が解決できる。「なぜ全員中級読解をとるの?」と単純に思った。

これらの授業では教員が一方的に教えて、学生同士にディスカッションさせることは少なかつた。

2.3 学生食堂での雑談

S・EさんとR・Uさんの紹介で、ほかの留学生(5人)と知り合い、仲良くなった。そして、昼休みによく香川大学の食堂でご飯を食べたり、会話をしたりしていた。

彼女たちはいつも手作りのお弁当を食堂に持っていく、みんなで話をしながら、昼ごはんを食べていた。彼女たち全員が鞆の中のお弁当を取り出したときは、正直言って、信じられないほど驚いた。最初は偶然であると思ったが次の週、その次の週、彼女たちはいつもの通りにお弁当を持ってきた。

食堂の料理に彼女たちがまだ慣れてないと思った。「还没有习惯吃日本菜(日本の料理はまだ慣れてないだね)」とS・Eさんに聞いてみたら、「没有啊,我很喜欢吃日本菜。(いえ,そうでもない,日本料理が好きですよ)」と返事してくれた。「大学食堂的菜很难吃吗?(大学の食堂の料理はまずいですか)」とたずねてみると「没有啊。(いえ,そうでもない)」と言った。「那为什么,不吃食堂的菜呢?(じゃ,なぜ,食堂の料理が食べないのですか)」と聞いた。彼女はちょっと考えて「我有一个姐姐在成都的一个论者立大学上学,每年要缴很多学费,我来日本的路费和学费都是家里借的钱。所以为了早点还上借款,这里的学费和生活费用自己打工的钱付。(私はお姉ちゃんがいる。現在は成都にある私立大学で勉強している。毎年多くの授業料を払わなければならない。私の香川大学の学費や来たときの交通費など,全部,親が親戚に借りてくれた。だから,早く借金が返済できるように,こっちの学費や生活費などは自分でアルバイトして払おうと思う)」と言った。

他の交換留学生に聞いてみたら、みんなは日

本の料理が食べられないのではなくて、親に迷惑をかけないように、できるだけ節約して、自分の力で生活をしようとしていることが分かった。

2.4 高松市国際交流協会主催の日本語サロンでの様子

筆者は高松市に来てから、友人の紹介で高松市国際交流協会主催の日本語サロンに参加し、現在も続けている。日本語サロンというのは日本語を話す自信のない外国人が、日本人のボランティアたちと話をしながら日本語を話す練習をするところである。サロンは毎週、火曜日、木曜日、日曜日の3回行われる。火曜日は午前の10時から12時まで、木曜日は18時から20時まで、日曜日は13時から17時までであり、担当はB・Bさんという日本人のボランティアである。

彼女たち（交換留学生）は日本に来て二週間後、日本語サロンに来るようになった。12月末までは毎週出席した。

2007年10月11日の午後6時に、彼女たち（7名）全員が日本語サロンに来た。B・Bさんは彼女たちに出席カードを配って「いらっしゃい、名前と出身地を書いてください。交換留学生ですわ」と言った。J・Bさんは「私たちは何も言わないのに、なぜ、知っているの」とB・Bさんに尋ねた。B・Bさんは「言わなくても、わかる、毎年この時期、交換留学生が来るからね、楽しみに待っていますよ」と回答した。この日は日本語のボランティアが少ないので、S・Eさんは筆者の傍に座って、中国語で故郷の話をした。R・UさんとK・Hさんはサロンの担当者の両側に座っていた。T・GさんとK・Jさんは何かを日本語で話をしていたようである。それまで、筆者は日本に来て以来、中国人同士の間で日本語を話すのは見たことがなかった。そのときは、本当に「すごいな」と思った。

その日以来、彼女たちと日本語サロンのボランティアと電話やメールのやり取りをして、だんだん仲良くなった。

2007年11月29日はR・Uさんの誕生日を祝うために、担当者がケーキを作って誕生日パー

ティーを開いてくれた。ボランティアたちは誕生日の歌を歌って、お祝の言葉を送った。その後みんなはケーキを食べながら、日本語の練習をした。R・Uさんにとって、日本に来て初めて「日本人の親切さを感じた」そうである。

しかし、日本人が親切と言っても、保証人になるのは嫌である。2008年1月17日、R・Uさんは毎週のように日本語サロンに来た。アルバイトの関係で保証人のことをボランティアに頼んだが「私は困るから、別の人に聞いてみたら」と断られた。その後、誰がR・Uさんの保証人になったかはわからない。

3. 2007年度江西師範大学交換留学生へのインタビュー調査

3.1 インタビュー調査の概要

- ① 調査者〔高ネイ、崎浜聡（ピア）〕（両名とも香川大学大学院教育学研究科大学院生）
- ② 調査期間〔2008年8月25日から2008年8月29日〕
- ③ 調査場所〔香川大学教育学部8号館：視聴覚準備室・大学院生室・学生食堂〕
- ④ 調査人数〔6人（7人中）〕
- ⑤ インタビューの形式（個人面談、グループ面談）
- ⑥ 調査方法〔半構造化インタビュー及び質問票〕
- ⑦ 聴き取り方法〔スクリプト（書き取り）及びICレコーダーでの録音〕
- ⑧ インタビュイーへの説明〔研究調査への協力と論文掲載の承諾（全員了承）〕
- ⑨ インタビュー言語（日本語、中国語）
- ⑩ 調査研究の計画〔インタビュー計画書、質問票の作成、フィールドノートの準備、ICレコーダーの準備〕

3.2 ライフストーリー・インタビュー

今回のインタビュー調査では「半構造化インタビュー」を用いた。なぜなら、半構造化インタビューでは、対象者の自由な発言が尊重され、調査者は大まかな話の流れや確認などに気

をつけるだけであり、このような対象者の語りは、出来事の主観的な感情や動機などが意識的、無意識的に関わらず含まれていると考えられるからである。本章では、この半構造化インタビューに基づいて、交換留学生の「留学体験」を「ライフストーリー」として再構成する。

ライフストーリーとは、ライフヒストリー、オーラヒストリーなどと並んで、人生における様々な出来事や体験などを記録することである。例えば、進学、就職、結婚、出産、留学など。そもそもライフストーリーの「ライフ」は「人生」、「生涯」など、多様な意味がある。しかし、ライフストーリーは人の生涯を誕生から老年まで聞く研究だけをさすわけではない。逆に、「昨日起こった出来事」を語るというような短いライフを扱ってもよい。

3.3 K・Jさんの留学体験のライフストーリー 【K・Jさんについて】

K・Jさんは中国江西省出身で、20歳の女性である。中国にいるときから、日本の漫画やアニメ、ドラマが大好きで、日本語も日本語能力1級を取得しており、かなり上手である。江西師範大学の留学選抜試験では一番の成績である。日本留学に対する期待は高かった。

【中国での学生生活】

K・Jさんは日本へ留学する前は、江西師範大学の日本語教育学院ビジネス日本語学科の2年生であった。高校生の時から、日本のアニメ、漫画に興味があり、大学を受験する際には、迷わず江西師範大学の日本語教育学院のビジネス日本語専攻を選んだ。入学してからもK・Jさんはアニメを見ながら、日本語の勉強に取り組んでいた。成績はいつも上位であった。

江西師範大学の日本語教育学院では大学の前期にあたる2年間で、日本語に関する基本的な知識（文字語彙、文法、聴解、読解など）を中心とした授業を行い、後期3年になってからビジネスに関する授業が始まる。K・Jさんは3年生のときに、江西師範大学から香川大学へ短期留学プログラムに応募し、彼女は大学の留

学選抜試験で一番の成績で日本に留学することになった。したがって、ビジネスについて勉強をすることが出来なかった。

江西師範大学の日本語教育学院での授業について、K・Jさんは「中国では文法中心の日本語を学びました、実際のコミュニケーションはやりませんでした。日本語で話す機会が少ない。授業以外では話す機会がありません」と話してくれた。

【初めての異文化体験－言葉の壁とコミュニケーションの問題－】

2007年の9月16日に来日したK・Jさんはやっと、日本へ留学することになった。K・Jさんの言葉を借りると「生まれてはじめて、日本という異文化に飛び込んで来た彼女はさまざまな日本人と憧れの言葉で話をしようと思っていた」のである。彼女の日本での日々は香川大学における様々な日本語の授業に積極的に参加し、土曜日や日曜日に、民間で行っている日本語サロンなどにもよく参加した。しかし、日本の留学生活に不自由なく溶け込めることは容易ではなかったようである。

ある日、K・Jさんは一人で高松市役所に保険料を払いに行ったが、第一回の保険料を払っていなかったことで、担当者に今回分を含めて全部で6700円を請求された。しかし、K・Jさんは6700円を16700円と聞き間違えて、担当者と同論してしまった。結局、担当者がもう一人をやってきて、二人が何回も説明したので、やっとわかった。成績が優秀で日本語に自信があったK・Jさんにとって、この事件はショックだった。K・Jさんは苦笑しながら、このエピソードを語ってくれたが、これは中国人留学生たちが実感した「言葉の壁」を表していると思う。

しかし、彼女にとって、一番悔しいことは留学当初では言葉の問題だけでなく、コミュニケーションの難しさであった。中国で学んだ日本語は標準語だが日本に来たら地方の人々は方言で話をする。K・Jさんは方言がわからないので違和感を感じていた。方言で話ができると

親しい感じがすると思っていたK・Jさんは、できるだけ方言を使いたいが、話をするとうりでも標準語になった。コミュニケーションをうまく取れなかったせいでK・Jさんの来日当初は、「日本人と深く交際できなかった」と話してくれた。

【日本語学習のための工夫－メディア活用】

コミュニケーションをとるためにK・Jさんはいろいろな工夫をした。まず、テレビを観ることである。授業以外の空いている時間帯などは時間を決めて、テレビを観ることに努めた。しかし、日本のテレビ番組のスピードが速く、しかも、日本語の表現は難しいので、K・Jさんは慣れなかった。段々テレビに興味がなくなり、やがて、やめてしまった。その代わりにラジオを聴くようになった。每晚、寝る前にラジオをつけて、番組を聴きながら寝る。ラジオはK・Jさんにとってかけがえのないものかもしれない。ある日、ラジオの調子がどうも悪かった、音がどうしても出ない、一晩中、K・Jさんは寝られなかった。

【香川大学の授業】

2007年10月1日、香川大学の後期の授業が始まった。K・Jさんの日本での留学生活は約1ヶ月経っていた。勉強はまだ落ち着いてなかったが日本語能力試験が目の前に迫っていた。この試験はK・Jさんたち留学生にとって非常に大切な試験であった。なぜなら、江西師範大学では日本語能力試験を取得しないと卒業できないからである。K・Jさんは1級を取得するために、香川大学において、日本語中級文法1、中級聴解、日本語中級読解などの授業を受講していた。試験が終わるまで毎日、寝る間も惜しんで勉強した。

日本語の授業は外国人向けの授業なので、日本人の学生がほとんどいない。K・Jさんは大学で学問を学ぶことが一番の目的であるが、同世代の日本人学生との交流にも強い希望を持っていた。日本語能力試験後、K・Jさんは日本語音声学、日本語教育学、夢分析、T教員の人

文地理を受けていた。これらの授業は日本人の学生と交流することができた。特に夢分析という授業であった。夢分析の授業ではK・Jさんが自分の夢をみんなに語るることによって、日本語で日本人学生と交流することができた。

また、T教員はよく留学生の面倒を見るから留学生の中で非常に人気がある。生活上の問題とか、進路のこととか、K・JさんはよくT教員と相談する。

ところで日本語能力試験結果はどうだったか。K・Jさんの努力は報われ、晴れて日本語能力試験1級を取得したのであった。

【アルバイト先での失敗】

2007年12月9日、日本語能力試験が終わった直後にK・Jさんはアルバイトを探し始め、2週間後にやっと見つかった。週4回ほど、二つの仕事を掛け持ちして、アルバイトを始めた。一つは高松市サンポートにあるイタリア料理店。もう一つは喫茶店である。

イタリア料理店は高級な店で、お金持ちの客さんが比較的多い。だから、この店は接客の仕方や敬語の使い方などが普通の店より厳しい。K・Jさんは中国に居た時、アルバイトをした経験がなかったので、イタリア料理店の最初の日はよく間違った。

2008年1月2日に出勤した時のことである。仕事にまだ慣れてなかったK・Jさんはオーダーを取りに行ったが、メニューの説明ができなくて客さんに「他の人に変わって下さい」と言われた。彼女は自分の日本語に自信を持っていたが日本人と接触したら、日本語能力はまだまだと感じた。その日の夜、さらに、失敗をしてしまった。売れ残りのケーキを冷蔵庫に入れなければならないのにK・Jさんは冷蔵庫の傍に置いたままで家に帰ってしまった。翌日、そのケーキが食べられなくなり、捨てられてしまった。店長に怒られてしまった。

仕事の失敗だけでなく、店の店員との人間関係においても困惑を抱えていた。イタリア料理店の店員は年配者が多くて、ほとんどが香川県の方言で話をする。K・Jさんは方言がしゃべ

れないので、違和感があった。もちろん、店が暇なときに話をするがK・Jさんはどうも彼らの中に入れてくれない感じがした。

【そろそろ友達を作ろう！】

K・Jさんはイタリア料理店の店員との人間関係に困惑したが、喫茶店では「人間関係がうまくいってました」とのことである。喫茶店でアルバイトをしていた香川大学教育学部の日本人学生Aさんと知り合った。AさんはK・Jさんと年齢が違うがだんだん仲良くなって、恋愛や結婚の話で盛り上がった。話の中でK・Jさんが知らない単語があったら、Aさんが熱心に説明してくれた。Aさんとよく会話することで、K・Jさんの日本語はより自然な日本語が話せるようになった。

喫茶店ではもう一人の日本人の従業員がいた。その子は19歳の女性で謙虚な人でBさんと言った。K・JさんはBさんともすぐに友達になった。K・Jさんはカラオケが好きで、2008年4月のある日、彼女はチューターや香川大学の友人を誘って、みんなでカラオケをすることにした。歌を歌いながら話をするのはK・Jさんにとって何よりも楽しかった。

2008年6月に入り、K・Jさんにとっては帰国する時期に近づいた。喫茶店の従業員達はK・Jさんのために送別会をした。しかも、みんなが日本の浴衣をプレゼントしてくれた。浴衣はK・Jさんがずっと前からほしいと思っていたもので「とてもうれしかった」そうである。筆者にその時の様子を語った彼女は、本当にうれしそうな顔をしており、彼女にとって忘れられない思い出なのだ実感できた。

【楽しかったこと】

2008年7月、帰国するまで後2ヶ月となった。来日してから、これまで、毎日勉強やアルバイトなどに追われていたK・Jさんは高松市から出たことがなかった。夏休みのある日、K・Jさんは旅行することを決意し、同じアパートに住むクラスメート（他の江西師範大学の留学生の6人）に相談すると、全員が旅行に

行くことに賛成であった。そして、K・Jさんとクラスメート6人が東京に旅行に出かけた。夜行バスに乗り、約12時間をかけて、ついに東京ディズニーランドに到着した。

ディズニーランドでK・Jさんは子どもみたいに、思う存分遊んで、来日してからの苦労や悩みなどを全部忘れてしまった。その晩は予約したホテルに泊まり、翌日、東京タワーやお台場、秋葉原などを観光して回った。この1泊2日間の東京旅行はK・Jさんの日本留学生活において、楽しい思い出になった。

東京旅行を皮切りに、大阪のユニバーサルスタジオや広島、京都の嵐山など旅行にでかけた。

【ホームシックにかかった】

2008年8月、夏休みに入った。K・Jさんはアルバイトの日数も増やした。8月の1ヶ月はほぼ毎日アルバイトをしていた。以前は週3、4回ほどインターネットを通して、家族と顔を合わせて話をしてきた。しかし、8月に入って、アルバイトでぐったり疲れたK・Jさんは家に帰ったらすぐに寝てしまい、家族と話をすることが一回も出来なかった。アルバイト生活の味気ない毎日で、K・Jさんは急に、ホームシックにかかった。

【留学生活における希望】

2008年9月中旬、K・Jさんは帰国の準備を始めた。一年間、日本の留学生活の中にいろいろなことを学んだが、文化や習慣の違いや自分のおとなしい性格のため、K・Jさんはまだ、日本人と深く交際できていないと感じていた。このままで帰国することに彼女は甘んじていなかった。ある日、もっと日本人や日本人の生活を知りたいと思ったK・Jさんはホームステイを体験することを決意した。そして、大学の留学生センターへ相談に行った。しかし、大学側は「そういう事はしていません」との回答であった。

【将来に迷う】

帰国する際にK・Jさんは、自分の将来につ

いて「中国に帰って、江西師範大学の学業を修了したら、日本語の教員になりたい」と話し、「中国では大学院を出ないと日本語の教員にならない、日本の大学院に進学することを考えています」と日本の大学院への進学を希望した。しかし、「留学の保証人」、「専攻」など様々な問題を解決しなければならない。K・Jさんは自分の将来を迷っていた。

4. ライフストーリーのテキスト解釈 ー自己変容の物語として読むー

K・Jさんの半構造化インタビューによって、留學生活についての様々なエピソードを聴き取ることができた。前章では、このインタビュー・データを基に留學体験のライフストーリーを構成した。筆者は、留學生が日本の留學生活で直面する困難を具体的に解決していく試みは、大きな人間的成長の契機となっていると考えている。そこで、本章では、K・Jさんの語りの中に含まれる「人間成長」の言説を「自己変容の語り」として解釈してみる。

4.1 日本留學への選択

K・Jさんが江西師範大学の2年生の終わり頃に「短期留學生プログラム」で日本の大学に留學できる機会に巡り会って、日本での生活を夢見るようになった。おそらくK・Jさんは、この「短期留學生プログラム」がなかったら日本への留學を考えることはなかったであろう。なぜなら、中国から日本へ留學するための費用は約150万円かかるが、中国の平均年収は22万円くらいなので留學費用は平均年収の7倍にもなり、一般的な家庭である彼女の家にこのような多大な費用を準備することは困難であった。さらに、金銭的な面だけでなく、個人的な面としては、留學前の彼女は19歳の未成年であり、両親の許可を必要としていたことや一人で異国の社会で生活することへの不安があったであろう。

4.2 言葉の壁ーコミュニケーションの難しさー 留學当初の失敗のエピソードとして「市役所

での聞き間違い」があった。これは、中国にいる時から日本語に慣れ親しんでいたK・Jさんにとって、日本語を語学として学ぶだけでは、決して日本生活や日本人との交流がうまくいかない、という経験になった。しかし、彼女は、この失敗を「日本語の勉強不足」と理解して、さらに日本語の勉強に取り組むことになる。

4.3 大学生生活

K・Jさんは、2007年度の後期に、外国人向けの日本語の授業を受け、日本語能力試験にも参加した。2008年度前期の授業では、日本語学を中心に「夢分析」などの専門科目も受講した。大学の授業では、参与観察で紹介したように、K・Jさんの日本語能力は高く、筆者は彼女がこの授業で勉強する必要がないと思ったほどである。しかし、大学の授業で優秀な成績だったK・Jさんがアルバイトや人間関係で「異文化の壁」を感じたのは、日本語能力以外の要因が大きかったからだと推測できる。

大学での人間関係は、指導教員やチューター、授業で知り合った日本人学生であった。彼らとの関係は良好であり、一緒に食事やカラオケに行くことも多々あった。

留學生であるK・Jさんにとって、大学での授業やイベントへの参加は、日本の大学生生活を体験するよい機会であった。

4.4 アルバイトの経験

インタビューにおいてK・Jさんは「中国にいる時にアルバイトをしたことがありませんでした」と述べている。これは、日本でのアルバイト経験が、単に異文化の経験だけでなく、社会人としての経済活動を含んだ人生経験の一つとして大きな意味を含んでいた。彼女の場合、留學先でのアルバイト体験が、人間成長に大きく作用したと考えられる。

一つは、日本でのアルバイトは、「言葉」や「コミュニケーション」による壁が立ちはだかった。まず、この「壁」を乗り越えなければならなかったことである。ライフストーリーの「アルバイト先での失敗」の項目で上げたイタリア

料理店でオーダーを取りに行ったお客さんに「他の人に代わって」と言われたことや年配者の従業員とあまり仲良くなれなかったことを、彼女は終始「言葉」や「コミュニケーション」による「壁」として受け止めていた。この困難を克服するために、彼女は、「日本語学習のための工夫－メディア活用」や「留学生活における希望」の項目で紹介したように、「言葉」や「コミュニケーション」の学習に一生懸命に取り組んだ。

もう一つは、アルバイト先で知り合った日本人との友人関係である。イタリア料理店の店員たちと仲良くできなかつたと悩んでいた彼女は、喫茶店で知り合った同じ世代の女性の日本人と大変仲良くなった。K・Jさんははじめて異文化の壁を越えて二人の日本人の友人と恋愛や結婚の話をするまでの関係になった。彼女達との出会いによって飛躍的に日本語でのコミュニケーションが上達した。また、これに勇気を得たK・Jさんは「ホームステイ」にも挑戦しようとするが、これは大学側の支援がなくて実現することはなかった。二人の友人は、K・Jさんのことを応援した。彼女達の存在がK・Jさんの日本での生活をかけがえのないものにしたことはK・Jさんの感想文から筆者は読み取ることができる。

人間は異文化に関係なく、深く交流することができるというよい例であろう。しかし、このような親友の存在は、留学体験を越えて、K・Jさんにとって非常に重要なことではないだろうか。

4.5 K・Jさんの自己成長の語り

K・Jさんは、質問票における留学体験の感想文において「異文化の壁のせい、彼らの内心世界には入れないというような無力感を覚える。一年間の留学生活においてこの「壁」を乗り越えられなかった」回想していた。その要因として「もう少し日本語の勉強に取り込んだら、日本人との交友範囲を広げたら、もっと充実した留学生活が送れたはずではないか。」と述べているように、自身の「日本語能力」の低さを

問題にしている。

一方で、インタビュー時に自身の嫌いな面を「自分の不器用が嫌い、言葉遣いや人間関係が不器用」と話しており、留学生活における失敗を単に「異文化の壁」だけではなく、自身の性格にも要因があることを示唆していた。

このような消極的な性格を克服する試みとして「ホームステイ」を希望したことは、友人の応援もあったとしても、K・Jさんにとって大きな挑戦（自己変容）だったに違いない。しかし、そのきっかけを築いたのは、日本人の二人の親友であったのであるから、彼女達との出会いはK・Jさんにとって大きな転機であったことは間違いない。K・Jさんは「彼らとはいっぱいっぱいの思い出を作ることができた。その友情はわたしにとって一生の宝物になることでしょう。」と感想文で語っているように、二人の日本人の親友との出会いは、「人生」においても非常に重要な出会いであった。

本章では、K・Jさんの留学体験のインタビューに基づいたライフストーリーを異文化体験における自己変容の語りとして解釈した。これによって、異文化体験に伴う『苦痛』という困難に対して、この困難を自分の力で乗り越えようとする意欲や努力によって「人間成長」が促進される、ということが明らかになった。

5. 留学体験のもう一つの困難性

前章では、K・Jさんの留学体験のライフストーリーを自己変容の物語として読み直し、留学体験の困難を乗り越える過程に伴う自己成長の様子を見てきた。しかし、一方で、留学生が直面する問題の中には、個人の努力では、解決できない大きな事柄を含んだものがある。つまり、留学を受け入れる日本社会（日本人）や大学側の問題である。本章では、2007年度江西師範大学交換留学生の事例研究を通して浮き彫りになった留学を受け入れる側と交換留学生側の両者の問題点を取り上げ、両者が取り組むべき課題を指摘したいと思う。

5.1 留学受け入れ側の問題点

5.1.1 香川大学

(1) 指導教員とチューター

指導教員やチューターは留学生にとってかけがえのない存在である。今回のインタビュー調査において、指導教員やチューターによって留学生に対する「支援」が異なっていることがわかった。例えば、筆者の「指導教員やチューターは自分で決めることができるのですか?」という質問をR・Uさんにインタビューした時に、「指導教員もチューターも学校が決めました。指導教員と専門が合わないことがあります。中国人のチューターは日本語の勉強にならないのになってほしくありません」と述べているように、留学生が日本で生活を十分に満足できない要因として、チューターや指導教員を選択する自由度が低いことがあげられるのではないかと考える。

(2) カリキュラム

二つ目は授業の内容に関するものである。日本語の授業ももちろん大切であるが、各学生の専門科目(ビジネス日本語)の授業数が少なかったことである。インタビューにおいて交換留学生のK・Jさんは「中国江西師範大学では前期にあたる2年間で、日本語に関する基本的な知識(文字語彙、文法、聴解、読解など)を中心とした授業を行い、後期3年になってからビジネスに関する授業が始まる、将来は迷っている」と述べているように、中国に帰って、四年生になる彼女たちはある意味では専門的な知識を学ぶ機会を失ったと言えるかもしれない。進学、就職に不利な状況に陥る場合も考えられる。

また、日本文化や習慣などの授業が少ない。それを考えて、留学受け入れ側は彼女たちにふさわしいカリキュラムを設定することが必要であると考えられる。

(3) 奨学金制度

金銭問題については参与観察の考察で取り上げた学生食堂でS・Eさんが「我有一个姐姐在成都的一个私立大学上学，每年要缴很多学费，我来日本的路费和学费都是家里借的钱。所以为

了早点还上借款，这里的学费和生活费用自己打工的钱付。(私はお姉ちゃんがいる。現在は成都にある論者立大学で勉強している。毎年の多くの授業料が払わなければならない。私の香川大学の学費や来たときの交通費など、全部、親が親戚から借りてくれた。だから、早く借金が返済できるように、こっちの学費や生活費などは自分でアルバイトして払おうと思う)」と話しているように、留学生は金銭的な問題を解決するためにアルバイトをしなければならない。しかし、アルバイトによって学業がおろそかになると考えられる。

金銭的な不安を解消するために、低額であっても全員に支給できるような奨学金制度を作ることも重要であろう。

5.1.2 日本社会制度の問題

日本の社会制度として、留学生が直面する「保証人」の問題がある。例えば、留学生が未成年であれば携帯電話の契約さえできない。もっとも重要なことは、アルバイトをする際に日本人の保証人を要求される場合があることである。参与観察においてもR・Uさんが日本語サロンのボランティアに保証人を頼んだが断られたエピソードを語ってくれた。この保証人の問題は、日本人でも親戚以外の人にはなかなかしてもらえないものである。しかし、留学生の親戚が日本にいるケースは稀であろう。そうすると、留学生個人の努力では、なかなか解決できない問題である。したがって、論者は日本社会が保証人の問題を解決する必要があるのではないだろうかと思う。

5.2 交換留学生自身の問題点

参与観察の中で、彼女たちはほぼ同じ科目を受け、食事後の空き時間帯、図書館に行く時でも、集団で行動する。中国人グループだけで行動すれば、授業以外はほとんど中国語を使用する。コミュニケーションを取る機会を増やすため、またそれによって、日本をより理解するためには、中国人同士のグループで行動することは極力控えたほうがよいと思う。

また、彼女たちはクラスに韓国人と台湾人がいたがめったに話をしなかった。他国の留学生との交流があまり図れなかったように思う。筆者が同じクラスの韓国人と学生食堂で偶然同席したときに、挨拶を済ませると韓国人同士が韓国語で話しを始めた。論者は韓国語がわからないので、話の中に入れなかった。この出来事を江西師範大学の交換留学生に話をすると「日本に留学に来て、他の国の留学生と話をしても、日本語がうまくならないので仲良くならなくてもよいから、気にしないほうがいいよ」と言われた。このような彼女たちの考え方はどのように理解すればよいのだろうか。

「日本語がうまくならないので仲良くならなくてもよい」という言い分は彼女たちの留学動機が大きく関わっていると考えられる。なぜなら、一年間という短い期間に日本社会で生活し、日本語や日本の文化、習慣を修得、理解しなければならぬという制約があるからである。つまり、短期間で日本語や日本の習慣、文化等を理解しなければならぬ短期留学生にとって「異文化における異文化」の存在を受け入れるだけの余裕はなかなか出てこないであろう。

しかし、このような交換留学生の考え方は、「国際理解」や「多文化コミュニケーション能力」の観点から考えると解決していかなければならない課題と言えるだろう。

註

- (1) 独立行政法人日本学生支援機構「留学生受け入れの概況」(平成19年12月) http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/data07.html アクセス日2008年9月11日。
- (2) 葛文綺『中国人留学生・研修生の異文化適応』溪水社、2007年、6-7頁参照。
- (3) 「参与観察」や「半構造化インタビュー」などの質的研究の手法については、佐藤郁哉『質的データ分析法』新曜社、2008年3頁を参照。
- (4) 研究参与者と研究者の関係性、そこにおける「同質性」の長所については、やまだようこ編『質的心理学の方法-語りをきく-』新曜社、2007年42

頁を参照。

- (5) 石井宏典「5 参与観察とインタビュー」ややまだようこ編『質的心理学の方法-語りをきく-』新曜社、2007年72頁。